＜無量寿経＞における阿弥陀仏の変遷

藤　　眞智

1．はじめに

＜無量寿経＞は、阿弥陀仏の誓願とその成就を説く経典である。現在＜無量寿経＞には梵本と蔵訳と次の５本の漢訳が存在する[1)]。

①『阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』（以下『大阿弥陀経』という）二巻、支謙訳（222 年から 253 年の間、但し訳者に異説あり[2)]。）

②『無量清浄平等覚経』（以下『平等覚経』という）四巻、支婁迦讖訳（実際は、帛延（又は白延）訳（258 年頃）と推定。但し訳者に異説あり[3)]。）

③『無量寿経』二巻、曹魏・康僧鎧訳（実際は、仏陀跋陀羅と宝雲の共訳（421 年）と推定。但し訳者に異説あり[4)]。）

④『大宝積経第五会　無量寿如来会』（以下『如来会』という）二巻、菩提流志訳（706-713 年）

⑤『大乗無量寿荘厳経』（以下『荘厳経』という）三巻、法賢訳（991 年）

＜無量寿経＞の各異本に説かれる阿弥陀仏の姿には、異同が見られ、何らかの理由で変遷したと考えられる。私はこのような＜無量寿経＞の教説の変遷には、他の大乗経典の教説が大きく影響していると考えており、他の大乗経典の教説との関係を考察する。

本研究では、阿弥陀仏の教化の範囲とその結果という点に焦点をあて、漢訳諸異本に見られる変遷を取り上げ、それに影響を与えたと考えられる大乗経典の教説を考察する。この点に焦点をあてる理由は、阿弥陀仏の教化の範囲とその結果が、＜無量寿経＞の中で広がりを見せていったことが確認され、そこには、他の大乗経典の教説からの影響があると考えられるからである。

そこでまず漢訳諸異本間の教説の異同を明らかにして、変遷においてポイ

ントとなる点をあげ、その点についての先行研究を確認し、それらの指摘を踏まえて、検討点を整理する。　続いて他の大乗経典を調査し、検討点と関係する教説を確認し、それとの関係を考察し、＜無量寿経＞における阿弥陀仏の教化の変遷の背景を明らかにする。

2．＜無量寿経＞の各異本における阿弥陀仏の特徴

各異本の本願の数には違いがある。そのため『大阿弥陀経』と『平等覚経』は「二十四願」、『無量寿経』と『如来会』、梵本と蔵訳は「四十八願系」[5]、『荘厳経』は「三十六願」と分類して呼ばれている。

各異本間の成立については、「二十四願」が「四十八願系」に先行したことには異論がなかったが、「三十六願」の成立が「四十八願系」の前か後かで議論が展開された。研究が進み「三十六願」は「四十八願系」より後の成立であろうとする説が有力となった[6]。

そこで本研究においては、「二十四願」「四十八願系」「三十六願」の順に成立したと考えて、『大阿弥陀経』、『平等覚経』、『無量寿経』、『如来会』、『荘厳経』の順番に阿弥陀仏の教化について、経典の内容を確認する。

なお異本間の用語が一定していないため、本研究においては仏を阿弥陀仏といい、その仏国土を極楽という用語で統一して用いる。そして経典からの引用については、○は原文を示し、◎はその書き下し文を示す。

(1)『大阿弥陀経』と『平等覚経』

『大阿弥陀経』と『平等覚経』は内容がほぼ同様なので、『大阿弥陀経』の箇所を本文に示し、『平等覚経』の該当箇所の新修大蔵経の巻と頁と行を註に示すこととしたい。

①極楽での阿弥陀仏の説法によって、聴聞者は道を得ることから始まり、四向四果を順番に得て、最後は不退転の菩薩となる[7]。

○阿弥陀仏。爲諸菩薩阿羅漢説経竟。諸天人民中。(中略)即得道。(中略)即得須陀洹。(中略)即得斯陀含。(中略)即得阿那含。(中略)即得阿羅漢。

（中略）即得阿惟越致菩薩。（大正 12.0307b22 ～ 27）

◎阿弥陀仏、諸の菩薩・阿羅漢の爲に経を説き竟るに、諸天・人民の中、（中略）即ち道を得、（中略）即ち須陀洹を得、（中略）即ち斯陀含を得、（中略）即ち阿那含を得、（中略）即ち阿羅漢を得、（中略）即ち阿惟越致の菩薩を得。

②出家の菩薩は、極楽に往生すれば不退転の菩薩になることが本願と成就文に説かれる[8)]。

＜第七願＞

○使某作仏時。令八方上下。無央数仏国。諸天人民。若善男子善女人。有作菩薩道。奉行六波羅蜜経。若作沙門不毀経戒。（中略）即来生我国。則作阿惟越致菩薩。智慧勇猛。（大正 12.0301b27 ～ c04）

◎もし某し仏と作らん時、八方・上下の無央数の仏国の諸天・人民、若しは善男子・善女人にて菩薩道を作すもの有りて、六波羅蜜経を奉行し、若しは沙門と作りて、（中略）即ち我が国に来生し、則ち阿惟越致の菩薩と作りて、智慧勇猛ならしめん。

＜成就文＞

○最上第一輩者。当去家捨妻子断愛欲。行作沙門。（中略）則往生阿弥陀仏国。（中略）則作阿惟越致菩薩。（大正 12.0309c26 ～ 0310a08）

◎最上の第一輩とは当に家を去りて妻子を捨て愛欲を断ち行じて沙門と作り、（中略）則ち阿弥陀仏国に往生し、（中略）則ち阿惟越致の菩薩と作らん。

③極楽の菩薩の中で成仏を目指す菩薩は、他方仏国に生まれて、仏となることが本願と成就文で説かれる[9)]。

＜第八願＞

○使某作仏時。令我国中諸菩薩。欲到他方仏国生。（中略）皆令得仏道。（大正 12、0301c06 ～ 08）

◎もし某し仏と作らん時、我が国中の諸の菩薩をして、他方仏国に到りて生ぜんと欲せしめ、（中略）皆仏道を得しめん。

＜成就文＞

○皆当作仏。隨所願在所求欲。於他方仏国作仏。（大正 12、0311a13 ～ 14）

◎皆当に仏と作らんに、願の在る所、求め欲する所に隨いて他方の仏国に於て仏と作らん。

(2)『無量寿経』

『無量寿経』になると、極楽に往生すれば不退転となり、その後一生補処の菩薩に至る。そして阿弥陀仏の教化は極楽に限らず、極楽以外の他方国土にも及ぶようになった。

①阿弥陀仏が法を説けば、道を得るとされたが、具体的な証果は説かれない。

○無量寿仏。爲諸声聞菩薩大衆頒宣法時。（中略）広宣道教演暢妙法。莫不歓喜心解得道。（大正 12.0273c14 ～ 17）

◎無量寿仏、諸の声聞・菩薩の大衆の爲に法を頒宣し給う時、（中略）広く道教を宣べ妙法を演暢す。歓喜し心解し道を得ずということ莫し。

②極楽に往生すれば、不退転となるとされる。

○諸有衆生聞其名号。信心歓喜乃至一念。至心迴向願生彼国。即得往生住不退転。（大正 12.0272b11 ～ 13）

◎諸の衆生有りて其の名号聞きて、信心歓喜し乃至一念せん。至心に迴向して彼の国に生れんと願わば、即ち往生することを得て不退転に住すればなり。

③極楽の菩薩は一生補処となると本願と成就文で説かれる。但し対象の菩薩から「普賢の徳の菩薩」を除くとされた。

＜第二十二願＞

○設我得仏。他方仏土諸菩薩衆来生我国。究竟必至一生補処。除其本願自在所化。（中略）開化恒沙無量衆生。使立無上正真之道。超出常倫。諸地之行。現前修習普賢之徳。若不爾者不取正覚。（大正 12.0268b08 ～ 14）

◎もし我れ仏を得たらんに、他方仏土の諸の菩薩衆、我が国に来生せば、究竟して必らず一生補処に至らしめん。其の本願ありて自在に化する所、（中略）恒沙の無量の衆生を開化して、無上正真の道に立たしめ、常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せんを除く。

＜成就文＞

○彼国菩薩。皆当究竟一生補処。除其本願。爲衆生故。以弘誓功徳而自莊厳。普欲度脱一切衆生。（大正 12.0273b19 ～ 21）

◎彼の国の菩薩、皆当に一生補処に究竟すべし。其の本願の衆生の爲の故に、弘誓の功徳を以って自ら荘厳し、普く一切の衆生を度脱せんと欲すを除く。

④本願が増広されて、他方国土の菩薩が不退転となると二か所で誓願された。

＜第四十七願＞

○設我得仏。他方国土諸菩薩衆。聞我名字。不即得至不退転者。不取正覚。（大正 12.0269b02 ～ 03）

◎もし我れ仏を得たらんに、他方の国土の諸の菩薩衆、我が名字を聞きて、即ち不退転に至らずんば、正覚を取らじ。

＜第四十八願＞

○設我得仏。他方国土諸菩薩衆。聞我名字。不即得至第一第二第三法忍。於諸仏法不能即得不退転者。不取正覚。（大正 12.0269b04 ～ 06）

◎もし我れ仏を得たらんに、他方の国土の諸の菩薩衆、我が名字を聞きて、即ち第一、第二、第三法忍に至るを得ず、諸仏の法に於て即ち不退転を得ること能はずんば、正覚を取らじ。

(3)『如来会』

『如来会』も『無量寿経』と同様、極楽に往生すれば不退転となり、その後一生補処の菩薩に至る。そして阿弥陀仏の教化は極楽に限らず、極楽以外の他方国土にも及ぶとされた。

①極楽では、阿弥陀仏が説法しているとだけ説かれる。

○法処比丘在彼成仏。号無量寿。今現在説法。（大正 11.0095c16 ～

17）

◎法処比丘は彼に在りて、成仏して無量寿と号し、今現に在して法を説けり。

②極楽に往生すれば、不退転ないし無上正等菩提を得るとされた。

○他方仏国所有衆生。聞無量寿如来名号。乃至能発一念浄信歓喜愛楽。所有善根迴向願生無量寿国者。隨願皆生得不退転。乃至無上正等菩提。（大正 11.0097c22 ～ 25）

◎他方の仏国の所有衆生にして、無量寿如来の名号を聞きて、乃至能く一念の浄信を発し歓喜・愛楽して、所有善根を迴向して無量寿の国に生れんと願う者は、願に隨つて皆生じて、不退転乃至無上正等菩提を得たればなり。

③本願と成就文で極楽の菩薩は一生補処となるが、「普賢道の菩薩」を除くとされた。

＜第二十二願＞

○若我成仏。於彼国中。所有菩薩於大菩提。咸悉位階一生補処。唯除大願諸菩薩等。（中略）行普賢道而得出離。（大正 11.0094a05 ～ 10）

◎若し我れ成仏せんに、彼の国中に於ける所有菩薩は大菩提に於て、咸悉く位階は一生補処たらん。唯だ大願ある諸の菩薩等、（中略）普賢道を行じ、出離を得るを除く。

＜成就文＞

○極楽世界所有菩薩。於無上菩提皆悉安住一生補処。唯除大願（中略）摩訶薩衆爲度群生修大涅槃者。（大正 11.0098b20 ～ 22）

◎極楽世界の所有菩薩は無上菩提に於て皆悉く一生補処に安住す。唯だ大願もて（中略）摩訶薩衆の群生を度せんが爲に大涅槃を修する者を除く。

④他方国土の菩薩が不退転となると三か所で誓願された。

＜第四十五願＞

○若我成仏。他方菩薩聞我名已。皆得平等三摩地門。（中略）乃至菩提

終不退転。（大正 11.0094c16 ～ 18）
◎若し我れ成仏せんに、他方の菩薩、我が名を聞き已りて、皆平等三摩地の門を得、（中略）乃至菩提まで終に退転せざらん。
＜第四十七願＞
○若我証得無上菩提。余仏刹中所有菩薩聞我名已。於阿耨多羅三藐三菩提有退転者。不取正覚。（大正 11.0094c21 ～ 23）
◎若し我れ無上菩提を証得せんに、余の仏刹中の所有菩薩、我が名を聞き已りて、阿耨多羅三藐三菩提に於て退転する有らば、正覚を取らじ。
＜第四十八願＞
○若我成仏。余仏国中所有菩薩。若聞我名応時不獲一二三忍。於諸仏法不能現証不退転者。不取菩提。（大正 11.0094c24 ～ 26）
◎若し我れ成仏せんに余の仏国中の所有菩薩、もし我が名を聞きて時に応じて一二三忍を獲ず、諸仏法に於て現に不退転を証する能わざれば、菩提を取らじ。

(4)『荘厳経』

『荘厳経』では、三十六願の全てで対象者の成仏が誓願された。本願は「我得菩提成正覚已。～悉皆令得阿羅多羅三藐三菩提。」という形式で誓願されているのである。（大正 12. 0319a27 ～ 0320c28）つまり阿弥陀仏の教化は終に成仏まで至ったことになる。

「四十八願系」の「一生補処」の願は、「一生でさとりに至る」と変わり、成就文も同様に変わった。そして「四十八願系」で対象から除くとされた「普賢行の菩薩」に対しては、その実践する仏事を阿弥陀仏が威力によって実行させると変わった。

＜第十五願＞
○我得菩提成正覚已。所有衆生令生我刹。皆具三十二種大丈夫相。一生令得阿耨多羅三藐三菩提。（大正 12.0319c18 ～ 20）
◎我れ菩提を得、正覚を成じ已らば、所有衆生をして我が刹に生じせしめん。皆、三十二種の大丈夫の相を具して、一生に阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。

＜第十六願＞

○我得菩提成正覚已。所有衆生令生我刹。若有大願未欲成仏爲菩薩者。我以威力。令彼教化一切衆生。皆発信心。修（中略）一切善行。悉皆令得阿耨多羅三藐三菩提。（大正 12.0319c20 ～ 25）

◎我れ菩提を得、正覚を成じ已らば、所有衆生をして我が刹に生じせしめん。若し大願有りて未だ成仏を欲せず、菩薩と爲る者をば、我れ威力を以て、彼をして一切衆生を教化して、皆信心を発せしめ、（中略）一切の善行を修せしめて、悉く皆、阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。

＜成就文＞

○彼仏刹中（中略）一切菩薩摩訶薩。一生令得阿耨多羅三藐三菩提。若有菩薩。以宿願故（中略）利益有情。我令隨意而作仏事。（大正 12.0324b25 ～ 28）

◎彼の仏刹中の（中略）一切の菩薩摩訶薩、一生に阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。若し菩薩有りて、宿願を以ての故に（中略）有情を利益せんとせば、我れ意に隨いて仏事を作さしむ。

そして対象者は、極楽への往生者は勿論のこと、十方一切仏刹の一切衆生、菩薩声聞まで広がった。「四十八願系」で「他方国土の菩薩が不退転となる」とする第 48 願は次のように変わった。

＜第三十六願＞

○我得菩提成正覚已。所有十方一切仏刹聞我名者。応時即得初忍二忍乃至無生法忍。成就阿耨多羅三藐三菩提。（大正 12.0320c25 ～ 28）

◎我れ菩提を得、正覚を成じ已らば、所有十方の一切の仏刹の我が名を聞かん者、時に応じて即ち初忍、二忍乃至無生法忍を得て、阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。

(5) 阿弥陀仏の教化の変遷のまとめ

以上を纏めると、阿弥陀仏の教化の変遷は次のように考えられる。

「二十四願」の阿弥陀仏の教化は極楽の中で行われる。阿弥陀仏の説法に

よって、聴聞者は道を得ることから始まり、四向四果を順番に体得し、最後は不退転の菩薩となる。また今世で出家の菩薩であったものは、往生すれば不退転の菩薩となる。そして成仏を求める菩薩は、他方国土に生じて成仏することが出来るとした。

このように阿弥陀仏の教化の範囲は極楽の中に限られ、教化の結果は声聞であれば阿羅漢まで到り、菩薩であれば不退転となり、菩薩の中で成仏を目指すものは他方仏国に生まれて仏となるとされた。このように内容は具体的に示された。

「四十八願系」になると極楽での説法による得果は説かれなくなり、声聞への教化の記述もなくなる。反面極楽に往生すれば、不退転となり、その後一生補処の菩薩に至ると説かれ、「二十四願」より進んだ形となる。但し一生補処の菩薩となる対象から「普賢道の菩薩」は除かれることに注意が必要である。そして新たに本願が増広されて、極楽以外の他方国土の菩薩に対しても不退転となることが誓願された。

このように「四十八願系」の阿弥陀仏の教化は、範囲が極楽から新たに他方国土にまで広がった。結果については、極楽では一生補処の菩薩であり、他方国土では不退転の菩薩である。但し声聞については不明である。具体的な内容は消え、抽象的となった。

「三十六願」になるとさらに進んで、三十六願の全てで対象者の成仏が誓願される。その為「四十八願系」の一生補処の願は、「一生でさとりに至る」と変わり、「四十八願系」で除外されていた「普賢道の菩薩」に対しては、その菩薩が実践する仏事を阿弥陀仏の威力によって実行させると変わった。そして本願の対象者は、極楽の往生者は勿論のこと、十方世界の一切衆生、菩薩声聞とされた。

このように「三十六願」の阿弥陀仏の教化は、範囲が十方世界にまで広がり、結果は成仏させることにまで至ったのである。

(6) 教化の変遷についてのポイント

このように阿弥陀仏の教化は、「二十四願」から「四十八願系」そして「三十六願」へと変遷していったと考えられる。この変遷におけるポイントを挙げ、その点についての先行研究を確認し、それらの指摘を踏まえて、検討内容を整理する。

①「二十四願」では不退転の菩薩となるとされていたものが、なぜ「四十八願系」では一生補処の菩薩になると変わったのかという点である。

不退転の菩薩から一生補処の菩薩に変ったことについての研究は見られないが、『無量寿経』で極楽の菩薩が一生補処である理由について、柴田泰山氏と藤田宏達氏の研究がある。

柴田氏は、『無量寿経』の教説から極楽の菩薩は、「無量寿仏の威神力を受けたうえで、菩薩行を実践し、無生法忍を獲得し、無量寿仏の授記を受けるからである」と指摘する[10)]。

そして藤田氏は「一生補処が当時の部派仏教・大乗仏教を通じて術語化されていた教理用語であり、これをそのまま用いて往生者のさとりの在り方を表したもの」と指摘する[11)]。

両氏の指摘は説得力がある。しかし「二十四願」で不退転の菩薩とされたものが「四十八願系」で一生補処の菩薩になった理由は明らかではないので、その点について考察する。

②「四十八願系」で一生補処の菩薩から普賢行（道）の菩薩を除くとされたのはなぜかという点である。これは阿弥陀仏の教化が普賢行（道）の菩薩を対象としないことを意味しており、「四十八願系」で初めて現れたものだからである。

この点について、中御門敬教氏と柴田泰山氏の研究がある。

中御門氏は普賢行について、＜普賢行願讃＞の注釈書である＜普賢行願讃＞（伝）世親釈に基づいて「文殊の誓願―般涅槃せず菩薩として衆生救済を行う―を実践する菩薩行」との理解を示した。そして「一生補処とは、『この一生涯仏とならず菩薩として過ごす境地』と考えられ、普賢行とは『今後、衆生救

済が完了するまで輪廻を繰り返し、救済に励む菩薩行』と考えられる。つまり互いに相反する概念であるため、<無量寿経>編纂者は誓願のテーマが一生補処である以上、『普賢行』を容易に是認できなかった状況が浮かび上がる。しかし『普賢行』は究極の大乗菩薩行とも言え、<無量寿経>編纂者とて簡単には見過ごす訳にもいかず、”但し書き”という形で経典に挿入された可能性も指摘できよう」と論説した[12)]。

柴田氏は普賢行について仏馱跋陀羅訳の『大方広仏華厳経』六十巻（以下『六十華厳』という）の教説から、一切諸仏の威神力を受けて成立するものであること、そして諸仏からの授記を受けていることを明らかにした上で、「極楽において一生補処位を獲得する菩薩と普賢行を実践する菩薩を比較すると、前者が無量寿仏の威神力と授記を根拠に成立することに対して、後者は一切諸仏の威神力と授記を根拠として成立するという差異を見ることが出来る。即ち『無量寿経』が普賢行を例外事項として記載した理由は、第一に極楽に来生した菩薩がすでに自らの本願において普賢行を実践しており、あえて阿弥陀仏の極楽における普賢行の実践を要としないことが挙げられる。第二に普賢行を実践する菩薩は阿弥陀仏の威神力と授記を根拠とせず、自らの普賢行が一切諸仏の威神力と授記を根拠に成立しているからである」と指摘した[13)]。

両氏の説は共に明快で、普賢行の菩薩を除く理由として説得力がある。しかし普賢行について違いが見られる。それは普賢行の根拠となる経典の違いに起因するもので、中御門氏は、<普賢行願讃>にその根拠を求め、柴田氏は『六十華厳』に求めたところにある。これについては他の経典の調査の中で確認する。

③「四十八願系」になって、なぜ教化が極楽以外の他方国土にも及ぶように誓願されたのかという点である。

この点については、池本氏が般若経典により無数の菩薩が存在するとされたことから他方菩薩を対象とした願が新しく生まれたと指摘した[14)]。

藤田氏は「大乗菩薩思想の発達に伴って四十八願系になって新たに付加されたものである」と指摘した[15)]。

他の経典に説かれた誓願の内容を確認して、考察したい。

④「三十六願」になって、教化の範囲が十方世界にまで広がり、結果が成仏にまで至ったのはなぜかという点である。

結果が成仏にまで至ったという点については、柴田泰氏と大田利生氏の研究がある。

柴田氏は、『荘厳経』の訳者法賢が漢訳した経典の３分の２が密教経典であった実績から法賢を密教経典の訳出者と断定し、『荘厳経』の本願は密教の影響を受けていたと指摘した[16)]。

大田氏も柴田氏の指摘に加えて、密教は基本的に往生よりも成仏を中心においていることと、成仏ののち法身の菩薩として利他行を主張している点を挙げて、密教の影響を指摘した[17)]。

残されたポイントは、阿弥陀仏の教化が十方世界にまで拡大したのはどのような理由によるものなのかということである。

３．大乗経典と＜無量寿経＞との比較

２であげた検討内容について、他の大乗経典に説かれる教説を調査し、関係する教説を確認し、＜無量寿経＞との比較を行った。

①について一生補処の菩薩の用例を確認した。

一生補処の菩薩は、＜般若経＞に説かれる菩薩の四種の階位の最上位の階位として広く知られている[18)]。しかし＜般若経＞で一生補処の菩薩が説かれるのは＜小系般若経＞で一か所[19)]、＜大品系般若経＞で四か所[20)]だけで、どのような状態の菩薩を一生補処の菩薩というのかということについて、具体的には説かれていない。

そこで一生補処の菩薩について、他の経典の用例を確認した。

『六十華厳』「如来名号品第三」の序分の部分である。

○仏在摩竭提国寂滅道場初始得仏普光法堂。坐蓮華蔵師子座上。（中略）

与十仏国土微塵数等大菩薩俱。尽一生補処。悉従他方世界来集。（大正09.0418a26 ～ b02）

◎仏、摩竭提国の寂滅道場に在りて、初始めて仏を得て普光法堂にて蓮華蔵の師子座の上に坐せり。（中略）十仏国土の微塵数に等しき大菩薩と俱なり。尽く一生補処にして、悉く他方世界より来集せり。

これは、仏が摩竭提国の寂滅道場にいた時の状況を説く場面であるが、十仏国土から来集した数えきれない大菩薩は、みな一生補処であったとされる。ここに示される十仏国土の固有名詞は明らかにされていないが、菩薩が一生補処である仏国土が存在したのである。

『無量寿経』では、法蔵菩薩が「令我作仏 国土第一」[21] であることを願った結果として、「無量寿仏威神無極。十方世界無量無辺不可思議諸仏如来。莫不称歎於」[22] というように、十方世界の無量無辺の諸仏が称歎すると説かれる。これは極楽が十方世界の中で最勝であるとするものであるから、極楽の菩薩も一生補処の菩薩であるとしたのではないだろうか。

明確な理由ではないが、他の仏国土との比較において、極楽の菩薩は一生補処の菩薩であるとされたのではないかと考えられる。

②について中御門氏と柴田氏が根拠とした経典を確認した。

中御門氏が根拠とした＜普賢行願讃＞は、梵本、蔵訳、漢訳の諸本が現存している。最初の漢訳は仏馱跋陀羅訳の『文殊師利発願経』である。『文殊師利発願経』は四十六偈からなる経典であるが、その次の漢訳である不空訳『普賢菩薩行願讃』になると六十二偈となり、梵本、蔵訳と対応関係にあるとされる。不空訳をほぼ踏襲した内容が、般若訳の『大方広仏華厳経』（以下『四十華厳』という）に編入され、普賢の十大願として現れ、＜華厳経＞の代表する誓願となった[23]。

中御門氏が研究の中で参照したものは＜普賢行願讃＞の注釈書の一つである＜普賢行願讃＞（伝）世親釈であったので、ここではその内容を仏馱跋陀羅訳の『文殊師利発願経』で確認する。仏馱跋陀羅は、『無量寿経』の訳者であり[24]、柴田氏が根拠とした『六十華厳』の訳者でもある。

まず中御門氏が普賢行について「文殊の誓願―般涅槃せず菩薩として衆生

救済を行う―を実践する菩薩行」とした根拠を確認した。

中御門氏が指摘する文殊の誓願とは、『文殊師利発願経』の最後に説かれる偈文にある「文殊願」が指している内容とする[25]。

○厳浄普賢行　満足文殊願　尽未来際劫　究竟菩薩行（大正10.0879c24～25）

◎普賢行を厳浄し、文殊の願を満足し、未来際劫を尽して、菩薩行を究竟せん。

この「文殊願」に相当するものは、竺法護訳の『文殊師利仏土厳浄経』に説かれる次の文言であるとする[26]。

○仮使於本際　不知生死元　爲一一人行　如若干衆生（大正11.0897b09～10）

◎仮使い本際に於て、生死の元を知らず、一一の人の爲に行ずること、若干衆生の如し。

この箇所は文殊菩薩の前身者である安拔王が雷音響如来を詣でて偈で誓願を述べたところである。それが「文殊願」を指しているとするのである。

以上、中御門氏の説について、『無量寿経』と同じ時期に漢訳された経典で確認することが出来た。

次に柴田氏は、研究の中で『六十華厳』の該当箇所を逐次示して論を進めた。その一つひとつはここにあげることは紙面の都合から出来ないが、根拠として明らかなものであった。

続いて『文殊師利発願経』の中で、中御門氏が触れられていない箇所において『無量寿経』に関係するところがあるため、ここにあげたい。それは、普賢行の菩薩が最後に亡くなるときに阿弥陀仏を見て、極楽に往生して、阿弥陀仏から授記されたいと誓願している箇所である。

○願我命終時　除滅諸障礙　面見阿弥陀　往生安楽国　生彼仏国已　成満諸大願　阿弥陀如来　現前授我（大正10.0879c20～23）

◎願わくば我、命終時、諸の障礙を除滅し、阿弥陀に面見し、安楽国に往生せん。彼の仏国に生れ已りて、諸の大願を成満し、阿弥陀如来の現前にて我に記を授けん。

この箇所では、二つの問題点が指摘される。

一つ目は、普賢行の菩薩が極楽に往生することを願っていることである。それは、普賢行の菩薩が般涅槃しない菩薩であるとするならば、極楽の菩薩が一生補処の菩薩となることと、不整合が生ずることとなる。そのため、必然的に除外規定を設ける必要が出てくる。このことは中御門氏の説を支持することになる。

二つ目は、普賢行の菩薩が阿弥陀仏の授記を願っていることである。このことは、＜普賢行願讃＞の普賢行の菩薩と、柴田氏の指摘する『六十華厳』に説かれる普賢行の菩薩とは、異なることを意味している。仏馱跋陀羅が漢訳した時点では、『文殊師利発願経』と『六十華厳』は別々の経典であったため各々の普賢行は違っていることは考えられる。しかし＜普賢行願讃＞は『四十華厳』で＜華厳経＞に編入され、普賢の十大願として現れており、その末尾にも阿弥陀仏の授記を願っている[27]ことを考えると、『四十華厳』では華厳経の中に二種類の普賢行が存在したことになるのではないかと思われる。

「四十八願系」の一生補処の菩薩から除かれるとされた普賢行の菩薩が、いずれの普賢行の菩薩であるかここで明確にすることは出来ないが、阿弥陀仏の教化の範囲から除かれる対象が出現したわけで、ここに他の大乗経典の影響を指摘することが出来る。

③について、仏国土のある経典に説かれた誓願の内容を確認した。それは阿閦仏と薬師仏、それに仏国土建立の誓願を説く＜大品般若経＞の三経典である。

まず＜大品般若経＞で『無量寿経』と同時期に漢訳された羅什訳の『摩訶般若波羅蜜経』を確認した。「夢行品第五十八」で説かれる 29 種の願は全て自仏国土に関するもので、他方国土に関する願はなかった。（大正 08.0347b25 ～ 0349b06）

次に＜大品般若経＞で玄奘訳の『大般若波羅蜜多経第三会』を確認したが、「空相品第二十一」で説かれる 29 種の願は、同様に他方国土に関する願はなかった。（大正 .07.0641a04 ～ 0644c09）

そして、＜般若経＞と関係の深いとされる『阿閦仏国経』の異訳である唐代の菩提流志訳の『大宝積経不動如来会第六』を確認した。ここでも他方国

土を対象とした誓願はなかった。（大正 11.0103a05 ～ 18）

これらの結果から＜般若経＞関連の誓願においては、自らの仏国土に関するものだけで、他方国土を誓願の対象とは考えられていなかったと思われる。

他に仏国土を持つ如来として薬師仏がいる。達摩笈多訳の『薬師如来本願経』（大正 14.0401b26 ～ 0402a15）と、玄奘訳の『薬師琉璃光如来本願功徳経』（大正 14.0405a07 ～ 0405b26）に説かれる十二大願を確認した。両経の内容は、多少の違いはあるもののほぼ同じ内容である。

まず本願の対象は全ての願で衆生である。どの世界の衆生かという点については、本願中に「一切衆生」の語が見られることからあらゆる国土の衆生を対象としていると考えられる。

次に本願の内容は、衆生が苦難と考えていることや菩薩行を修する中で阻害となることを一つひとつ取り上げて、それを取り除くことを誓願している。

この内容を見ると、『無量寿経』に近い教説と言える。＜薬師経＞の成立は『無量寿経』より後だと考えられるが、自らの国土以外の世界に仏の影響を及ぼすという考えには共通する点がある。『無量寿経』で一部見られたものが、＜薬師経＞において全てに見られるようになったと考えることができる。

続いて請願の範囲を広げて、菩薩の誓願が説かれている経典を確認した。

『六十華厳』「十地品」の歓喜地で説かれる誓願である。その要約を示すと次のようになる。（大正 09. 0545b10 ～ 14）

第一　一切諸仏を供養する。
第二　一切諸仏の法を守護する。
第三　一切諸仏の八相に際して、悉く供養する。
第四　一切菩薩の所行で一切を教化し増長させる。
第五　一切衆生を教化し成熟させる。
第六　十方世界の差別を現前に知る。
第七　仏国土に入って、国土を浄める。
第八　大智慧をもって菩薩の行を具足する。
第九　不退の菩薩の道を行じて、所作が空しくない。
第十　仏道を得て、大智慧、大神通を求める。

誓願の形式として、各々の大願を述べた後に次の文言が説かれる。

○発如是大願。広大如法界。究竟如虚空。尽未来際。尽一切劫。（誓願の要約）。無有休息。

◎是の如き大願を発し、広大なること法界の如く、究竟せること虚空の如く、未来際を尽くし、一切劫を尽して、（誓願の要約）。休息有ること無し。

ここに述べられている誓願の内容は、いずれも自らの行動を通して、菩薩として成し遂げようとするものである。そして、一切諸仏、一切菩薩、一切衆生と全てを網羅するように説かれ、非常に広範囲に渡っている。そして形式からもわかるように時間の尽す限り休むことなくやり続けるとするのである。

この『六十華厳』の誓願と＜大品般若経＞の誓願とを比較すると、『六十華厳』には＜大品般若経＞にある「我作仏時、令我国土」[28] という文言がないところに違いが見られる。

つまり同じ菩薩の誓願であるが、＜大品般若経＞の誓願は作仏を目指して、自らの国土を建立する誓願であるのに対して、『六十華厳』の誓願は作仏し国土を建立するのではなく、菩薩として行う内容であり、対象も特定の国土に関わらない一切世界の一切諸仏や一切衆生なのである。これは『六十華厳』が十方世界について詳しく説くことに関係しているのではないかと考えられる。

『六十華厳』では、四か所で十方世界の様子（各方角にある世界とその仏とその菩薩の名称）を詳細に説いている[29]。その一々をここにあげることは紙面の都合から出来ないが、その名称は一か所を除いて全て異なっている。これは十方世界の名称は固定されるものではなく、それだけ無数の世界が蓮華蔵世界の周りには広がっているということを意味していると考えられる。そしてその十方世界から菩薩が、仏の説法座に来集して教えを聞くのである。つまり蓮華蔵世界の盟主である盧舎那仏は、十方世界の一切の諸仏、菩薩、衆生を教えの対象としていると考えることが出来る。

＜無量寿経＞においても「二十四願」で、十方世界から菩薩が阿弥陀仏の教えを傾聴するために来集したり[30]、諸天人民が極楽へ往生する[31] ことが説かれる。極楽は西方にあるが、十方世界の中心にある如く説かれるのである。しかしそれは極楽という舞台で行われるものである。「四十八願系」で

阿弥陀仏が他方世界にまでその影響を広げたのは、『六十華厳』に説かれる盧舎那仏の登場に影響されたのではないだろうかと考える。

それから『六十華厳』において、阿弥陀仏が諸仏国土に影響していると認識している箇所があるので、以下に紹介する。

○或見阿弥陀　観世音菩薩　灌頂授記者　充満諸法界　或見阿閦仏　香象大菩薩　斯等悉充満　妙楽厳浄刹（大正 09.0786b11 ～ 14）

◎或は阿弥陀、観世音菩薩、灌頂し記を授けたる者、諸の法界に充満するを見る。或は阿閦仏、香象大菩薩、斯等は悉く、妙楽厳浄の刹に充満するを見る

これは「入法界品」の最後に普賢菩薩が偈を説くところにあるもので、阿閦仏の影響が、妙楽厳浄の仏国土だけなのに対して、阿弥陀は記を授けたものが諸々の法界に充満していると述べている。

これは『六十華厳』が、阿弥陀の影響が極楽に限らず、諸々の世界に及んでいると認識していることを表わしていると考えられる。

④については、③で検討した他方世界への教化の広がりが発展して、十方世界にまで及ぶようになったと考えられる。

もともと＜無量寿経＞は「二十四願」から、十方世界から菩薩が阿弥陀仏の教えを傾聴するために来集したり、諸天人民が極楽へ往生するのであるから、極楽と十方世界との関係は重要であった。＜華厳経＞に説かれた盧舎那仏の登場をきっかけとして、世界は十方に具体的な広がりを見せ、薬師仏のように自らの国土以外の世界に仏の影響を及ぼすという経典も登場した。

それに呼応するように「三十六願」では、十方世界にまで広がったと思われる。＜華厳経＞で最後の漢訳となる唐代般若訳の『四十華厳』でも、先に『六十華厳』で指摘したように阿弥陀の影響が極楽に限らず、諸々の世界にまで及んでいると認識しているのは[32]、その表れではないかと考えられる。

4．まとめ

本研究の目的は、＜無量寿経＞における阿弥陀仏の変遷を阿弥陀仏の教化の範囲と結果という点から見ていこうとするものであった。

「二十四願」では、阿弥陀仏の教化の範囲は極楽に限られた。その結果は菩薩であれば不退転で、声聞であれば阿羅漢であり、内容は具体的であった。

「四十八願系」になると範囲は極楽以外にも広がった。結果は極楽では一生補処の菩薩に、極楽以外でも不退転の菩薩となった。但し一生補処の菩薩からは普賢行の菩薩を除くとした。

「三十六願」になると範囲は、十方世界にまで広がり、結果は成仏させることにまで至った。

このように「二十四願」から「四十八願系」「三十六願」へと変遷したことが確認された。

そしてこの変遷の中で四つの点をあげて、先行研究を踏まえ、他の大乗経典からの影響を考察した。四つの点とは①「四十八願系」で一生補処の菩薩になるとした点、②一生補処の菩薩から普賢行の菩薩を除くとした点、③「四十八願系」で、教化が極楽以外の他方国土にも及ぶようになった点、④「三十六願」で、十方世界の一切衆生を成仏させるとした点である。

考察の結果、「二十四願」から「四十八願系」への変化では、＜華厳経＞の出現がきっかけとなって、諸仏から称賛を受ける阿弥陀仏にふさわしい教化として、菩薩は一生補処とし、極楽から十方世界へと広がったのではないかと考えられる。そして「三十六願」になるとその流れは加速し、密教からの影響もあって成仏させるまでに至ったのではないかと考えられる。

今後は、阿弥陀仏のほかの面での変遷について、他の大乗経典からの影響について考察をしていきたい。

＜参考文献＞

池本重臣 1958『大無量寿経の教理史的研究』永田文昌堂
稲城選恵 1978『浄土三部経訳経史の研究』百華苑
大田利生 2000『増訂無量寿経の研究　思想とその展開』永田文昌堂 1990 初、

2000 増補
香川孝雄 1993『浄土教の成立史的研究』山喜房佛書林
柴田泰山 2005「『無量寿経』所説の「普賢之徳」について」『仏教論叢』49 号
柴田　泰 1966「法賢訳出経典について―無量寿荘厳経を中心として―」『印度学仏教学研究』第 14 巻第 2 号
中御門敬教 2002a「＜無量寿経＞と普賢行―＜普賢行願讃＞（伝）世親釈によめる解明―」『仏教論叢』第 46 号
中御門敬教 2002b「普賢行と普賢行願」『仏教文化研究』46 号
平川　彰 1989『初期大乗仏教の研究Ⅰ 平川彰著作集第三巻』春秋社
藤田宏達 1970『原始浄土思想の研究』岩波書店
藤田宏達 2007『浄土三部経の研究』岩波書店

註

1）藤田宏達 2007、PP19-87
2）支婁迦讖訳（178-189 年）香川孝雄 1993、PP.17-29
3）竺法護訳（308 年）香川孝雄 1993、PP.30-51
4）竺法護訳（308 年）稲城選恵 1978、PP.395-423
5）本願の数は『無量寿経』と『如来会』が四十八、梵本が四十七、蔵訳が四十九であるため、これらを「四十八願系」という。（藤田宏達：2007、P.89）
6）藤田宏達 1970、PP286-8、香川孝雄 1993、PP.278-289
7）『平等覚経』（大正 12. 0289a03 ～ 09）
8）『平等覚経』本願（大正 12. 0281c02 ～ 05）、成就文（大正 12. 0291c17 ～ 27）、『平等覚経』にだけ「二十我作仏時。我国諸菩薩不一生等。置是余願功徳。」（大正 12.0281c10 ～ 11）という本願がある。これを「一生補処」の願とすることは通説である。対応する成就文がないので、ここでは註に指摘することとした。
9）『平等覚経』には該当の本願はないが、成就文はある。「皆当作仏。隨心所願。在欲於何方仏国作仏。」（大正 12.0293a03 ～ 04）
10）柴田泰山 2005、P.166

11）藤田宏達 2007、P.336
12）中御門敬教 2002a、P.176-7
13）柴田泰山 2005、P.166-7
14）池本重臣 1958、P.240
15）藤田宏達 2007、P.326
16）柴田　泰 1966、P.169
17）大田利生 2000、P.216、242
18）平川　彰 1989、P401-5
19）『小品般若波羅蜜経』で見ると大正 08.0575a19 ～ 21 の一箇所である。
20）『摩訶般若波羅蜜経』で見ると大正 08.0225b05 ～ 08、0225c13 ～ 21、0226b04 ～ 06、大正 08.0358c09 ～ 0359a13 の四箇所である。
21）大正 12.0267b10 ～ 11
22）大正 12.0272c11 ～ 12
23）中御門敬教 2002b、P.1-2
24）『無量寿経』の訳者は大蔵経に収録されている経典上は康僧鎧と記されているが、仏馱跋陀羅と宝雲の共訳であるとする説が多くの専門家に支持されている。（藤田宏達 2007、P.80-5）
25）中御門敬教 2002a、P.11
26）中御門敬教 2002a、P.11
27）大正 10.0848a09 ～ 14
28）『摩訶般若波羅蜜経』で見ると大正 08.0347c07 など
29）「盧舎那仏品」大正 09.0405c26 ～ 0407a28、「如来名号品」大正 09.0418b19 ～ c28、「入法界品」大正 09.0677c07 ～ 0679a12、大正 09.0694c03 ～ 24
30）『大阿弥陀経』大正 12.0307b09 ～ 19『平等覚経』大正 12.0287c18 ～ 0288a25
31）『大阿弥陀経』大正 12. 0301b08 ～ c05『平等覚経』大正 12. 0281b27 ～ c09
32）大正 10.0842b15 ～ 16